



## 三人旅下

笑福亭 松鶴  
カツト 三遊亭 志ん藏

偕て三人は明星の宿へ参りますと、モウ黄昏時、宿屋の行燈にはチラホラと燈が入つて居ります。宿引きのいなごしやない下女さんは平常は畑や田の草を引きに出て居りますが、道者の入り込む時期になりますと宿屋へ雇はれますので、背はすんなりと低ふて、よう肥へて背の高さより横巾の方が廣い、四斗樽みたいで顔はと申しますと人三化七と云ふて、人間が三分で化け物の方へ七分

寄留します。色がくつきりと黒うて、額が出て、額が鎗頤で頬が出たある代りに鼻が御遠慮申してる。頭の毛が赤うて縮んでるので四方出に縮の髪と云ふ、顔へ白粉を塗つたのが一生の誤り、常は白粉に馴染がないので附いてる所と附かん所が出来て、焼残りの藏か、石灰小屋の馳か、冬瓜が夕立に逢ふた様な、口に紅を附けたが唇一杯に塗たので、青光りに光つてぶんくの背中みたい

な、喋ると涎をくるので口紅が流れて人喰ふた狼みたいな口元で、頭へ鍼力で造つた簪を十五六本も差して、歩くとゴツチンガラリンチンガラリンと新米御輿が宿替へでもする様に賑やかで、足は上から下まで太うて延べ附けで、象が脚氣を病らうた様な、歩くとドシン／＼と地響がして、足袋は十三文甲高と云ふ、跣で歩くので足の甲の上へ埃が積つて苔が生へて、春先になると蓮華草が咲いたある、踵には靴が切れてる、去年の靴が切れ残つて今年の靴が切れて來年の靴が芽生へしてる、靴の間に米粒が這入つてる粟粒が這入つてる、麥に稗に大豆に蠶豆が這入つたある、雜穀屋の店を簞掛けにした様な、歩くと鶏がこつてゐる中から蚯蚓が出る、蛙、蛙が出る、蟬に狼に山賊が出ようか窟やみたいな足をして居ますが、流石女で島田に髪を結ふて、赤い鹿の子を掛けまして赤襷で、頭のてつべんから黄な聲を出して、お客さんと呼んで居ます。

「貴方さん方、お泊りやないかな……三味線囃子入り唄」  
「泊りやないか、泊らんせ」  
「一寸貴方さんお泊りや御座りまへんか、一寸手前の方は肥前屋で御座ります」  
「私の方は紀州屋で御座ります」  
「手前は播磨屋で」  
「此方は傳法屋で」  
「へへへ、私の方は伊丹屋で御座ります」  
「ナア清やん、ひぜんやないかきしゅうやないか、でんぼやないか張つたら痛いやないかと云ふてよる」  
「違ふがな、肥前屋に紀州屋に傳法屋に播磨屋に伊丹屋と云ふてゐるのや」  
「何處へ泊るねん」  
「先刻馬子が云ふてよつた、三田屋は玄關横付けやと、三田屋で泊る」  
「あないに引張つりよるがな」